

REDISCOVERY TSUSHIMA

# 津島短編小説コンテスト

平成30年度受賞作品集―愛知県津島市が舞台の短編小説

大賞

ラストラン!

佳作

バンド・シテイ・津島



# 目次

受賞者	1
選考講評	2
受賞作品	4
大賞	
「ラストラン！」	シカマ サユキ
佳作	
「バンド・シテイ・津島」	松宮 信男
応募結果	19
募集要項	21

## 大賞

ラストラン！

シカマ サユキ（静岡県伊東市）



学生時代を過ぎた名古屋での懐かしい日々や名古屋弁を思い出しながら小説の題材を探していた時の事です。昔、天王川公園でオートレースが開催されていたと知り胸躍らされ、離れて暮らす高齢の父からの電話で免許返上を聞かされたことが頭の中で重なり映画でも観ているかのようにこの物語が生まれました。

急に思い立ったように二年ほど前から仕事の合間に小説を書きはじめ、家族からは冷たくあしらわれていましたが、大きな賞をいただけただけで背中をポンと押されたような気がしています。このような文学賞を企画して下さり、さらに作品を選んでくださった選考委員の方々にお礼申し上げます。ありがとうございます。

## 佳作

バンド・シテイ・津島

松宮 信男（京都府京都市）

私が吹奏楽をしていた時、ティンパニ奏者の美少女に失恋したことがあります。「尾張津島秋まつり」の石探祭車の和太鼓や鉦を叩く祭装束の女性たちを見た時、その美少女が、もし津島の生まれだったらと思った瞬間に、今回の作品のイメージが出来上がりました。京都生まれの私にとって、祭りに打ち込む津島の女性たちの姿は、それほど魅力的に見えたのです。ドミトリー・シヨスタコービッチの交響曲第五番も、「尾張津島秋まつり」の祭囃子も、どちらも非常に熱狂的な民衆のエネルギーに満ち溢れています。今回拙作に対し、このような素晴らしい賞を授けて頂けたことをとても嬉しく、また光栄に感じます。

# ◆ 選考講評 ◆

## 選考委員長

堀田 あけみ  
(作家・大学教授)



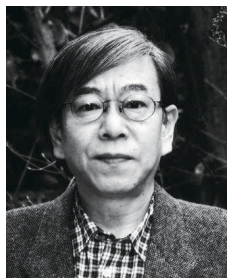
1964年 愛知県七宝町(現あま市)生まれ。作家・心理学者・椋山女学園大学教授。  
1980年 中村高校在学中に『1980 アイコ十六歳』で文藝賞受賞。

今年は、津島の魅力を発信できている作品が揃っていたと思います。早くから、少数の作品に候補を絞ることができたのですが、そこが大変でした。大賞「ラストラン！」は、まず天王川公園でオートレースが行われていたという史実をネタにしたところが強かったと思います。アイディアの独創性のみならず、丁寧に魅力的な人物を作り上げ、物語を構成しています。泣かせる話の数倍楽しい、気持ちよく笑わせる話をものできていて、読後感が抜群です。「バンド・シテイ・津島」は、完成度の高い作品でした。人物が魅力的に書かれていて、音楽の知識が上手く物語を回しています。ただ、実際に津島がバンドシテイたり得るかという点、そうではないわけで、楽団が実在していたら、別の結果だったかもしれません。「洋食雑記」は題材を生かし切れなかったように思います。魅力的な作品です。

### 【主な著書】

『イノセントガール』『唇の、することは。』『発達障害だって大丈夫』『おかあさんになりたい』『おとうさんのつくりかた』『花くらべ』『泣けてくるじゃない』『もういない、あなた』など。

清水 義範  
(作家)



1947年 名古屋生まれ。作家。  
1981年 『昭和御前試合』で文壇デビュー。  
1986年 『蕎麦ときしめん』で前例のないパスティーシュ(様式模写)の分野を開拓。  
1988年 『国語入試問題必勝法』で吉川英治文学新人賞受賞。  
2009年 第62回中日文化賞受賞。

大賞を受賞した「ラストラン！」は、老人たちの免許返納を機に、かつてあった天王川公園の池の周りで行われていたレースを再現しようという話で、破天荒なニューモアがあった。ドタバタの小説ながら構成が巧みで楽しく読ませ、多くの選考委員の評価を得た。バイクと自転車と車椅子とのレースというのもぶつとんだ設定で、それでいてうまく盛り上がり主人公のしげじいが勝つ。老人に元気があると小説は今こそ求められているものではないかと感じた。佳作の「バンド・シテイ・津島」には音楽があって、心地よく読み進むことができたし、構成の巧みさによつて、男女の関係がすんなりと読みめた。津島の楽器工房がうまく使われていて、ラストが生き生きしているのもよい。シンプルな文体で、面白いストーリーが語られていると思つた。津島の魅力もよく伝えていていると思つた。

### 【主な著書】

『金鯱の夢』『永遠のジャック&ベティ』『イマジン』『おもしろくても理科』『尾張春風伝』『愛と日本語の感乱』など。

## 清水 良典

(文芸評論家)



- 1954年 奈良県生まれ。  
文芸評論家・愛知淑徳大学教授。  
1986年 群像新人文学賞(評論部門)受賞。  
1993年 名古屋芸術奨励賞受賞。  
2011年 愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。  
2012年 第65回中日文化賞受賞。

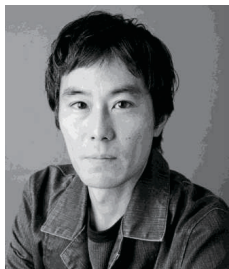
津島市といえば天玉祭や藤まつり、という定型に収まらない作品が今回に入賞した。大賞作品の「ラストラン！」の元氣さには審査員全員が圧倒された。昭和42年まで行われていた天王川公園の池を周回するバイクレースを、仲の良い老人たちが周囲に呼び掛けて再開しようという奇想天外な発想が楽しく、ひたすら前向きで元氣の出る小説である。登場人物たちのキャラクターがよく出ていて、レースの実況も迫力がある。老人を扱いながら、ネガティブな方向へ行かないエネルギーに打たれる。佳作の「バンド・シテイ・津島」は、元カノに呼ばれた男が吹奏楽団の指揮者になる話だが、シヨスタコーヴィチなどクラシック音楽の蘊蓄をそつなく消化したユニークな素材が存在感を発揮した。もう一作、「洋食雑記」も、最後まで入賞を争った。1935年に津島市を訪れたと謝野晶子の未発表短歌2首が「まのや」から発見されたニュースを活かした作品で、題材そのものに大きな価値がある。

### 【主な著書】

『笹野頼子 虚構の戦士』『自分づくりの文章術』  
『村上春樹はくせになる』『2週間小説を書く！』  
『MURAKAMI』『文学の未来』『あらゆる小説は模倣である』など。

## 熊澤 尚人

(映画監督・脚本家)



- 1967年 名古屋市生まれ。映画監督・脚本家。  
1994年 榎ポニーキャニオン在職中に自主映画『リべらる』が PFF に入選。  
2003年 短編映画『Tokyo Noir～Birthday～』がスペイン映画祭に招待。ポルト国際映画祭最優秀監督賞を受賞する。  
2005年 『ニライカナイからの手紙』で長篇映画デビュー。

3回目を向かえ年々レベルが上がり、拝読するのが大変楽しかったです。今は着眼点の鋭い作品が多く、唸らされました。単に津島を舞台に物語を書くのでなく、津島の魅力を様々な角度から熟考し、新しい魅力を明るく元氣に発信した作品が選ばれたのは大変有意義だと思います。「ラストラン！」、天王川公園でオートレースが行われていたのに驚きました。意外性に満ちた題材を、運転免許返納という暗くならがちな話をユーモラスなストーリーに変換したのが良かったです。本当にレースが復活する事を願っております。「バンド・シテイ・津島」も題材の良さが光りました。オーケストラのティンパニ奏者が実は和太鼓奏者で、津島の祭りに繋がりに、市民吹奏楽団という未来と挑戦の話に至る、テンポの良さが心地良かったです。個人的には「洋食雑記」が良かったです。史実からフィクションへの想像力の跳ね方が面白く、亡くなる前の晶子が、若い女学生に負けじと、生きる力を取り戻そうとする、その声が胸に刺さり、深さの残る作品でした。

### 【主な代表作】

『親指さがし』『虹の女神』『雨の翼』『DIVE!!』『おと・な・り』  
『君に届け』『ジククス!!!』『近キョリ恋愛』  
『心が叫びたがってるんだ』『ユリゴコロ』『ごっこ』

## 木全 純治

(映画館支配人)



- 1948年 名古屋市生まれ。  
1983年 名古屋市中村区の映画館シネマスコレ支配人。(～現在)  
椋山女学園大学非常勤講師、中部大学非常勤講師。

大賞となった「ラストラン！」は、津島の天王川公園の池の周りで行われていた過去のオートレースを、現在の新しい装いで題材にした秀逸な作品である。高齢者の免許返上を背景にオートバイ、自転車、車椅子などの異種競走に仕立てた点は、躍動感と共に読み応えがあった。佳作となった「バンド・シテイ・津島」は、文体が流麗でさつぱりした味わいのある作品になっている。男女の恋愛感情が、死や病気に用いられるのではなく、ふたりの時間経過の中で成熟し、再会が果される展開が良い。クラシックの音楽を効果的に使いつ、あたかも津島市民吹奏楽団があるかのとき設定も、よく生きている。その他では、「虎之助の鬼退治」に意表をつかれた。戦国時代の津島で、加藤清正と福島正則の少年時代の出来事が語られ、津島の歴史の深さをよみかえらせた点を評価する。

### 【主な芸術活動】

- 1992年 アジア文化交流祭代表(～1995年)、中日新聞ビデオ案内担当(～現在)  
1996年 あいち国際女性映画祭ディレクター (～現在)  
2005年 EXPO2005 フレンドシップ・フィルム・フェスティバルディレクター  
2007年 NHK 文化センター映像制作講師 (～現在)

# 大賞

## ラストラン！

シカマ サユキ

「おじいちゃん、がんばれー」

「よしおちゃん、ふあいとー」

「しげじい、まけとつたらあかん」

天王川公園には「スタート」と書かれた横断幕が掲げられ、その周辺には老若男女大勢の人が詰めかけ、応援する叫び声が飛び交っていた。

「おじいちゃん」と叫ぶ小さい子供の元気のよい甲高い声の中に、渋いしゃがれた声で「まけとつたらあかん」と叫ぶ声も聞こえる。時折「ふあいとー」とか「あなたー」とか色つばい黄色い声も混じっている。

その声援の先にはスタートラインに並んだ男達がいた。それぞれが自慢の愛車と寄り添いながら、派手なスポーツウェアに身をまとい人だかりに向かって手を振る者がいたり、カッコいいつなぎを着て腕や足を動かして準備運動している者もいる。応援する者もスタートラインに立つ者も、いろいろな思いを抱きながら、今か今かとスタートの号砲を待っていた……。

ことの始まりはバイク好きのしげじいが発した一言だった。

しげじいは若い頃から何よりもバイクを愛して休みとなればツーリングに出かけ、暇さえあれば愛車をぴかぴかに磨く自他共に認めるバイク男だった。

「免許返上してバイクをやめるわ」

突然言い出してみんなを驚かせたのは、いつもの商店街の間が居酒屋に集まって盛り上がっていたときのことだった。現役バリバリの大工でもあるしげじいは、一週間ほど前に木材を担ぎ上げたとき、腰を痛めてしまい弱気になっているという話をしていううちに、酔った勢いで宣言したのである。

それを聞いた新聞配達店のよしおちゃんがすかさず突っ込んできた。それも必死に早口でまくし立てた。

「えっ、しげじいっ。ほんまか。バイク仲間がおらんくなったら、つまらんがね。撤回してちよっつ。まーかん。わしや、許さん！」

よしおちゃんは、現役の新新聞配達員でもあり、毎朝バイクに

またがっている。それに商店街を二人で並走して走って不良老人と言われることを口癖のように自慢していたくらいだ。

その二人のやり取りを見ていた酒店を営むコウジンも、元カメラ屋のまささんも一緒になって、もう少し考えた方がいいよとしげじいを説得するも、もう無理だとか、今が引き際だとか言って聞く耳を持たない。

それに従い楽しい酒の席が段々と沈んだ暗い雰囲気になっていった。年を取るついでやだねえ、とか、体の節々が痛いだの陰気くさい話がオンパレードになっていったのだ。

そんな時だった。足を悪くして車椅子生活を余儀なくされている元銀行員のミッチーが良いことを思いついたんだけど、と威勢のいい前置きをして話しはじめた。

「あのよお、最後にオートレース開かん？ ほら、若い頃、天王川公園でやつとつたるー、あれよ。この際だからしげじいとよしおちゃんとひと勝負するっていうのはどう思う？」

大正十五年から昭和四十二年まで天王川公園の池の周りをコースにオートレースが行われていたのだ。エンジン音を轟かせ、砂煙を上げて走り抜けるオートバイ。歓声に包まれながら輝いていたライダーたち。若い頃にたびたび開催されていたあのオートレースを憧れの眼差しで沿道で応援していた事を思い出したのだ。

突然の名案に目が点になって黙り込んでいたよしおちゃんも

コウジンもまささんも、それぞれに同時に当時の思い出が蘇ると一斉に話し出した。

「あーそうそう、かつこよかったわ。懐かしいでかんわ」

「あれ見て、バイク欲しなつたけど、いろいろあつてあかんかったがね」

「毎回楽しみにしとつたのに。あのでら速い選手、何て人だったっけなあ」

それぞれが勝手に思う存分喋りただけ喋ると、誰からともなく「やるまい、絶対開こまい」と言い出し、一致団結しはじめた。さらに「いつやるん」と聞く事を前提にして話がとんとん拍子に進んでいく。

「あかんわ、二台しかありやせんもん。格好つかんわ」

皆が大騒ぎする間も黙っていたしげじいは盛り上がっている所に釘を刺すように、ぼつりとそう言った。確かに二台だけでレースって言うのも盛り上がりには欠けそうだ。誰かバイクに乗っている人を知らないかとなったが、思いつくのは若いものばかりでそれはそれでレースにならなさそうだ。

「じゃあよ、おれ、車椅子で走るわ！」

ミッチーは授業中の小学生のように右手を真っ直ぐ上げてそう宣言した。車椅子歴二十年のベテランだし、以前やっていたテニスの競技用車椅子を持つて、かなりスピードも出るから勝負してみたいという。

「そんなもんレースにならんわ」

「そんな事ないわ、バイクにも負けんて」

「危いやあよ、転んだらどうすん、年寄りばっかや」

「これで死ぬるなら本望やん」

話はこじれて変な方向へどんどんと向かっていく。それぞれが勝手な事を言い合っていると、しばらく黙っていたしげじいだったが、またボツリと言いだした。

「じゃあよ、ハンディつけたるで、どうなん」

「何言つとんの」

「だからよ、バイクは三周、車椅子は一周、つて言つとんだわ」

「しげじい、あつたまええなあ。それでええやん」

だんだんと羨ましくなってきたまささんもコウジンもいてもたつてもいられなくなつた。

「じゃあ、オレも出るわ。孫に自転車でも借りてよ」

「そんならわしも。娘の電動アシストで出たるわ」

「ずるいがね、電気で動くやつはあかん、反則だがね」

「ちよー待つてよ、オートレースつちゆうのは、自動つてことだしよ、そんなら反則じゃないがね」

話してんでばらばらの状態でこの日は終わつた。さすがに言いたいことを言うだけの年寄り同士ではこれ以上の話し合いは無理だつた。

一週間ほどが過ぎてからまたいつものメンバーは酒を飲むために集つた。全員揃いも揃つてオートレースの話を進めたくてうずうずして一週間の過ごし方を、と知るとお互い笑いあつた。さらに噂を聞きつけた元警察官のケイジと行きつけのスナックのママのアイコも加わつた。一週間のそれぞれのアイデアを持ち寄り、最初から具体的な話が繰り広げられていったのだ。

「乗り物はよ、バイクでも車椅子でも自転車でもかまわんがね。しげじいの言うようにハンディ付けたりやええがね」

「スピードを競うつて言うのは、危ないがね。バイクでこけたりぶつかつてみ、元もこうもないわ。予想タイムを決めといて一番近い人が優勝とか、つてのはどおなん？」

「いや競争じゃなくてもええわ、みんなでいっぺんにゴールでもおもしろいがね」

「でもよ、やつぱり命懸けてでも勝負したほうがええ、絶対その方がええつて」

しげじいも、よしおちゃんも、コウジンも、まささんも、ミツチーも真剣だ。前向きな意見がどんどんと出てくる。

「レースつてことはさあ、レースクイーンがおらなあかんよね？」

ニコニコしながら話を聞いていたアイコが、茶化すように色つぽく口を挟んできた。若い子限定でお願いねとミツチーに言われるとふてくされた表情をした。



「おい、それより安全は大事やと思うんだわ。年が年だし、無茶なことすると警察の許可が下りんがね」

しかし、さすがはケイジだ。ツボを得た意見だ。一番の問題は、警察の許可が下りるかなのだ。この意見には皆が納得して、安全第一を念頭において計画を進めようということになった。

それからというものの実現へ向けての話し合いは何度も行われた。噂はどんどんと広がり、話し合いに参加する人もどんどんと増えていった。いろいろな意見が飛び出してきて、それをしげじいとよしおちゃんの不良老人組と、しっかりもののミッチー、警察につながりのあるケイジが取りまとめて進められていったのだった。

半年ほどが過ぎ、話し合いは大詰めを迎えていた。

警察とケイジとの話し合いでやはり安全性が指摘され、スピードの出る乗り物は制限速度を設ける事、接触しないように監視員を配置する事などを前提に許可が下りた。

それを基にしげじいとよしおちゃんは、参加する選手を募集しながら制限速度とハンデイを設定したり、危険行為などのルール作りや、走行するルートの整備や確認、配置する監視員の確保などで奔走した。

残りのメンバーもオートレース開催の告知や、スポンサーになつてくれる会社を募集、当日に出店してくれるお店を集めたりしながら、全員一丸となってオートレース開催日を迎えたの

だった。

「第一コース、よしおちゃん選手、七十五歳、バイクで丸池三周」

マイクを持ったケイジが、プロレスのリングアナウンサーを真似て威勢のいい選手紹介をはじめると、集まった大勢の観客は一気に歓声を上げた。がんばれーの声援があちこちから聞こえ、ヒューヒューと指笛も響いている。

よしおちゃんは、新聞配達用のバイクに左手を掛け、右手を大きく振っている。配達用で背中に名古屋新聞と大きく書かれたジャケットを羽織り、ジーンズという地味な出で立ちながら足元だけはこの日のために買ったという皮のブーツが異様に輝いていた。

「第二コース、ミッチー選手、七十四歳、車椅子で丸池一周」

再び歓声が上がった。車椅子で大丈夫なのかという心配の声があちこちから聞こえてくる。ミッチーは派手なスポーツウェアに身をまとい車椅子に乗ったまま、ガッツポーズをして車椅子生活で鍛えたのだという腕の力こぶを見せつけた。

こうして次々に選手紹介が続けられた。

全部で七コース。バイクが三台、自転車三台、車椅子が一台出場。全員七十代。それぞれが堂々とスタートラインに自慢の愛車とともに並んでいる。紹介されると選手はポーズを決め、

その度に拍手が鳴り歓声が上がった。まささんはやはり孫から借りた自転車で出場し、コウジンは娘から借りた電動アシスト付き自転車での出場だ。日々自転車に乗り練習をつんできたらしい。それから、ミッチーの昔のテニス仲間の吉田さんが原付きのバイクで、アイコのお店の常連客の佐藤さんが自転車で出場だと紹介された。どの選手も自信たっぷり笑顔で手を振っていた。

六コースの紹介が終わると、観客は最後の一人、第七コースに立つ最後の選手に視線が集まっていた。紹介前だと言うのに観客からは、次々に歓声が上がりはじめている。

しげじいだ。トレードマークのライダースーツに身をまとい、傍らには、この日のために磨き上げたピカピカの愛車のバイクが堂々と寄り添い、やはり他の選手を寄せ付けないオーラが漂っていた。

「第七コース、しげじい選手、七十八歳、バイクで丸池三周」ケイジの威勢のいいアナウンスが響き渡ると、大歓声が沸き起こった。今日一番の盛り上がりだ。まるで大スターがその場に居るかのような異様な雰囲気包まれはじめたのだ。

しげじいは、あまりの盛大な声援に少し恥ずかしそうに手を振り答えている。止まぬ歓声に何度も頭を下げて手を振り続けた。

そして、ケイジはスタンバイの合図を送ると、それぞれの選

手はバイクにまたがったり、ヘルメットを被ったり準備を始めた。そしてケイジがコースの外れに置かれたスタート合図用の四角い台の上にあがると同時に、三台のバイクはエンジン音を響かせた。

いよいよスタートだ。観客は固唾を呑んでスタートラインを見つめている。そして視線の先ほどの選手も真剣な眼差しでコースの先を睨んでいた。昔見たあのオートレースを思い出しているのだろうか。あの時見た憧れのライダーになりきっているのだろうか。きつと一番でゴールすることを思い描いているのではないだろうか。

その時、ケイジの手にしていた赤い旗が、真っ直ぐ水平にかざされた。そして数秒の沈黙のあと、号砲が鳴り響き勢いよく旗は振り上げられた！

スタートだ！

バイク三台が勢いよく飛び出した。エンジン音が響き砂煙があがり、同時に観客も一斉にそれぞれの応援する選手の名前を叫んでいる。少し遅れて自転車三台が追いかける。自転車に慣れていないらしい佐藤さんはフラフラと早くもコースから外れ始めていて監視員から注意を受けている。自転車で続いて車椅子のミッチーが一番遅い滑り出しであったが、力強く順調に真っ直ぐコースを走りはじめていた。

天王川公園の丸池は一周で八百メートル。その丸池の周囲を

バイクは三周、自転車は二周、車椅子は一周してスタートラインに戻るとゴールとなる。

先頭集団のバイクは制限速度は二十キロと決められているのでなかなか差がつかず、三台とも並走したまま走り続けていた。そして状況は変わらず並走しながらバイクはあつという間に二周目に突入した。観客の目の前を過ぎてゆく三台のバイクに歓声が上がった。

半周ほど遅れて自転車も二周目に入りはじめる。最初に通りに過ぎたのは電動アシスト付きで出場のコウジンだった。観客に向かつて余裕で手を振っている。さすがに疲れも見せず涼しい顔で通り過ぎていった。少し間隔が開いてはいたが、安定した走りを取り戻した二台の自転車がほぼ同時に通りすぎた。

ちようどその頃、トップ集団のバイクに異変が起きた。一番大きなカーブの箇所で吉田さんの原付きのバイクが軽くスピンし、それに驚いた吉田さんはブレーキをかけて止まったのだ。接触事故でも起きたのかと観客からはワツと悲鳴が上がった。監視員が走ってバイクに近づいていき、二人の間でやり取りがあり間もなくバイクは走り出したところを見ると、バイクも選手も大丈夫らしい。このことで先頭は二台のバイクの争いとなった。

一方、車椅子のミッチーは、滑り出しこそ順調であったが、苦戦を強いられていた。路面が走りづらく思いのほかスピード

が出ないのだ。スピードをあげようとすればするほど体力も奪われるらしく、一気にスピードを落とし疲れも隠せない状況になっていた。

バイク二台の並走は続いていた。しげじいとよしおちゃんとともに現役のライダーでもあり商店街の中を走り抜けるバイク仲間でもあるだけにお互いに譲れないデッドヒートを繰り返していた。そしてそのままの状態ですタートラインを越えて三周目に突入したのだ。観客の歓声もヒートアップして悲鳴にすら聞こえる。残り一周だ。

それに続くのは、電動アシスト付きのコウジンだ。二台の自転車を大きく突き放し順調に走り抜けている。自転車は二周でゴールとなるので、一台の自転車を追いかける二台のバイクという構図となっていた。

先頭を走るように見える電動アシスト付きのコウジン。時折確認するように後方を振り返っている。並走したバイクは砂煙を上げながら追いかけるように距離を縮めていく。

ゴール前に押し寄せている観客は、丸池をはさんだ向こう側で練り広げられているレースを歓声を上げながら応援していた。そして最終コーナーにさしかかる頃には、電動アシスト付きのすぐ後方にバイク二台が追いかける状況までになり、レースの行方がわからなくなってきた。

「しげじい、いけー」

「コウジン、あとすこしだぞー」

「がんばってねえ、よしおちゃん」

いよいよゴール目前とあって大盛り上がりだ。キャーキャーと絶叫に似た悲鳴が聞こえる。誰が一着になっても不思議ではない状況になっている。エンジン音がどんどんと近づいてきている。どう見ても三台は並んでいる。同時ゴールかあ！

その時だった。しげじいは狙いを定めてアクセルをふかすと一瞬にして加速し、バイク一台分抜き出るとそのまま大歓声で迎えられながらゴールした！

優勝はしげじい、二位は僅差でよしおちゃん、三位はコウジン。

しげじいの見事な作戦勝ちだった。

「優勝は、しげじいー」

表彰式が行われ、ケイジの叫ぶようなアナウンスに観客は湧きに湧いた。しげじいは小走りで駆け寄り表彰台に立つと、両手を上げて声援に応えた。そこへきれいに着飾ったアイコが花束とメダルを手に現れて笑みを浮かべてしげじいに近づいていく。

しげじいは照れくさそうに花束を受け取ると、首をそつと下げた。アイコはメダルをしげじいの首にゆつくりと掛け、一瞬の隙を突いて軽く頬にキスをする、観客はさらに湧いた。

「しげじい、よっ、日本ー」

「引退撤回しなかんわ、しげじいー」

飛び交う声援を受けながら、しげじいは花束を手に、メダルを胸に嬉しそうな笑顔を右に左にと観客に振りまいていた。

「ではー、しげじい選手から優勝と引退のメッセージですー」  
ケイジはそう叫ぶと、しげじいの前にスタンドマイクを立てた。恥ずかしそうにしげじいはマイクに近づいた。

「ありがとうございます」

しげじいはそう言って一礼すると声援を送っていた観客は、声を聞こうと一気に静まり返った。

「えーっ、わたくしはーっ、本日をもって免許を返上いたしました  
すがーっ、オートバイは永久に不滅ですっ！」

しげじいの声は公園に響き渡った。

しげじいと同じ名前でもある憧れの野球選手のセレモニーを真似て言い切ると、一緒に走った選手がしげじいの側に集まってきた。再び飛び交う声援を受けながら、一列に並んだ選手たちは手を振り続けた。

みんな満面の笑みを浮かべそれはもう幸せそうだった。

（了）

## 佳作

# バンド・シテイ・津島

松宮 信男

八月中旬の曇天の空は、午後七時を過ぎてもまだ明るく、日中の残暑の名残を留めている。私はもう三十分も、名鉄津島駅前で待たされていた。

『あいつは何時も勝手だ。いや、勝手だった……』

JR京都駅中央口前で、高速バスに乗り込んだ時から、何度も呟いてきた言葉をまた頭の中で繰り返す。

日比野繭子が、昨日の朝いきなり携帯に電話をかけてきて、『明日の土曜の午後七時に、名鉄の津島駅まで来てくれない。大事な話があるから』

と言った時、つい承諾してしまった。そして、京都から繭子の実家がある津島市まで、一番安く行くにはどうしたらいいかを、ネット検索していた。自分の中に拒否する気持ちがある、全くなかったことに気が付いたのは、後になってからだだった。

私が初めて繭子に会ったのは、京都市立芸術大学大学院・修士過程・指揮専攻一回生の「オーケストラ実習」の時だ。

学内で音楽ホールとして使われている講堂のステージ上、学生オケの下手側一番奥のティンパニ奏者の位置に、長い髪の美しい美少女が控えていた。それが繭子だった。

実習曲は、ドミトリー・ショスタコービッチ作曲、交響曲第五番『革命』の第四楽章。

正直言ってあんな女の子に、革命の激動を象徴するあの猛々しい楽譜が叩けるのかと不安になった。

ステージの下手端に立つ指導教授のところへ行き、小さな声でそのことを告げると、

「まだ学部生だが、とても音楽的感性が豊かなので、定期演奏会のメインプログラムの奏者として採用した。彼女なら大丈夫だよ。立派にティンパニ奏者としての役目が果たせる」という自信に満ちた言葉が返ってきた。

定期演奏会の本番は、指導教授が指揮をする。自分が振るオケのプレイヤーに、腕が拙い人間を使うことはないだろうと思いい、自分を納得させた。

それにこちらの研究活動のため、学生オケのメンバーには貴重な練習時間を割いて協力してもらっている手前、文句が言える立場でもなかった。

普段は、二台のピアノを前にして、指揮のレッスンを受けている。フル・オーケストラを指揮できる機会は、専門課程の大学院生といえどもめったにない。

気持ちを切替え指揮台上がり、一気に指揮棒を振り下ろした。その瞬間、ステージの空気が一変した。

凄まじい眼光で私を睨み、両手のマレット（撥）でティンパニを堂々と叩く繭子の勇壮な八分音符が、オケ全体を完璧に支配していた。指揮者でありながら、その気迫の凄さに一瞬気押されたことは事実だ。

それ以来、恋人同士になってからも、彼女には押されっぱなしだった。初めて「関係」した時も繭子主導だったし、その後二年間の恋愛期間の全てが、彼女中心に動いた。にもかかわらず、繭子の大学卒業時に私が結婚話を切り出すと、

『私は津島に戻って、父の打楽器工房を継がなきゃならないの。プロを目指す高梨さんとは生きる道が違うわ』

と言い、あっさり私から離れていった。

以後、電話やメールで幾ら誘っても、決して私と会おうとは

しなかった。

こうして繭子から解放され、真剣にプロの指揮者になるため、学業に専念できたのは、大学院・博士後期課程の三年間だけだったといつてよい。

だが、幾つかの指揮者コンクールに挑んでみたものの、何の成果も出せず、

『繭子にはすつかり人生を狂わされてしまったな』

と根拠のない恨み言を幾度となく呟き続けた。

その院生生活も来年の三月で終わる。将来に全くあてがなく、単位取得満期退学が決まっている。

名鉄の赤い車両が、高架の上を走っているためか、津島駅の駅舎は二階建ての平たい建物になっており、高架に沿うように左手に伸びている。

駅のロータリー広場の前を、この都市の目抜き通りである天王通りが走り、その左側の建物には「津島ガス」の青い字が、右側の建物には、白地に赤の「愛知銀行」の看板が見えている。

実は、私が津島市を訪れたのは、この時が最初ではなかった。付き合い始めた年の十月、繭子に誘われて「尾張津島秋まつり」を見に来たことがあった。

当時、駅前広場には多くの山車（だし）が並び、からくり人

形の妙技が繰り広げられたり、車切（しゃぎり）と呼ばれる山車を回転させる祭りの出し物が披露され、けっこう楽しむことができた。

中でも特に興味を引かれたのは、石探祭車（いしどりまつりぐるま）と呼ばれる山車より小振りな、まるで平安朝の牛車を思わせる三輪車の数々による和楽器の競演だった。

石探祭車の後部には和太鼓が嵌め込まれていて、その両側に一つずつ大きな鉦（かね）が吊るされている。常時三人の囃し手で演奏され、太鼓の叩き手は次々と入れ替わる。

繭子も当日、緋色の法被に白い股引と地下足袋姿という祭装束で現れた。

長い髪を頭の上に結い上げ、手ぬぐいの鉢巻きできりりと引き締めている。顔に施したメイクも艶めかしく、何時もの彼女とは違いとてもセクシーに見えた。

同じ色の法被姿の十数人の男たちに交じって、ホイッスルを吹き鳴らしながら太鼓を打つ繭子の姿は、「熱狂する女神」と呼ぶに相応しいほどエキセントリックだった。

彼女が叩く、太鼓の七拍子のテンポが上がるに従い、両端の鉦の囃し手や時折声を発し手を挙げる取り巻き連中たちのテンションも上がっていき、より狂乱の域に達した。

そんな彼女の凄まじい眼光の輝きは、初めて会った時のティンパニを連打する繭子を彷彿とさせた。そして、その抜群の音

楽センスは、この祭りによって子供の頃から育まれたものに違いないと確信した。

私たちが、肉体関係を持ったのは、その夜のことだった。付き合い始めてから、既に半年近くが過ぎていた。

繭子の実家は、この祭りに使う和楽器の製作や修理を行う楽器工房を、何代も前から津島で営んできたという。

オーケストラのプロ打楽器奏者に十分になれるほどの実力を持ちながら、打楽器工房の跡取りになるため、私の元を去り津島に帰郷した彼女の「郷土愛」が、あの「尾張津島秋まつり」の熱狂に根差したものであるとするならば、当然の成り行きだと思われた。

それにしても、繭子に急に呼び出され、再び訪れた津島駅前広場の様子は、秋まつりの時と同じ場所とは到底思えないほど、閑散としていた。

広場に並べられた多くの山車や石探祭車。打ち鳴らされる和太鼓や鉦。方々で吹き鳴らされるホイッスルや合いの手の掛け声。広場を埋め尽くした大群衆の歓声と溜息。それらの全てが、過去の幻影として、脳裏に蘇る。それほど、数年前のあの秋まつりの体験は、強烈なものだったことに気が付いた。

あの夜、祭りの熱狂を身体に留めたままの繭子に誘われるように、タクシーで乗り付け宿泊したシテイ・ホテルは、何処だ

ったのだろうと考えた。

彼女から、どんな話があるにせよ、もはや二人の仲が元に戻ることはない。

それならば、かつての思い出に浸れるあの場所を今夜のねぐらにしたいと、生温いことを考えていた時、急速度で走つてきたワンボックスカーが、私の前に停車した。ドアに『津島打楽器工房』と印字されている。

窓が開き運転席の女性が、

「お待ちせ。乗ってちょうだい」

と声を掛けてきた。

一瞬それが繭子だと、分からなかった。

三年ぶりに会った彼女は、長かった髪をショートにカットしている。

「ね、早くして」と急かすその語気が、思い出の中の繭子と重なった。

急かされてドアを開け、車に乗り込んで助手席に座ると、車内には重苦しい短調の弦楽合奏の調べが流れ、即座に二人だけの密閉空間が現出する。

久しぶりに会って、どう声をかけていいか分からず、挨拶代わりに

「この演奏は、ユーリー・テミルカーノフ指揮のサンクトペテルブルク・フィルハーモニーか？」

と問いかけた。

「そう。交響曲第五番『革命』の第三楽章」と答え、彼女は車を発進させた。

この曲のスコアは、完全に頭に入っている。私が一番好きな曲だ。あと数分で猛々しい第四楽章を聞くことになるだろう。運転しながら繭子は、「急にごめんね」と言い、続けて「その後、将来の見通しは立った」と聞いてきた。

私は、

「ブザンソンに応募したけど、エントリーさえされなかった。PMFにも落されたし。もうどうしようもないよ」

と答え、津島市街地の風景に視線を泳がせた。

「高梨さんは、才能はあるけど音楽的カリスマ性が欠如しているのよ」

これは大学院時代に、指導教授からも散々言われたことだ。

「初めて指揮台で見た貴方は、とても輝いてたのに。付き合ってみると、ぐだぐだ、うじうじした男で、本当に見込み違いだったわ」

と言い、繭子は一頻り笑う。

「俺とのこと、後悔してるのか？」

私は恐る恐る聞いてみた。

「もしそうなら、今日呼び出したりしないわ」

即座に答えた彼女の声から笑いが消える。



その言葉を聞き、

『三年の間、俺を避けてきた繭子に、一体どんな変化があったのだろうか？』

と考えた。

「来年から、どうするの。後期博士課程も終わりでしょ？」

何故か探るような聞き方をしてくる。

「何も決まってるない。数百万円の奨学金の返済も始まるし、本当に頭が痛いよ」

「もうプロは諦めて、吹奏楽の指導者になったら。オケだけが指揮をする現場じゃないでしょ」

「それも考えた。だがスクールバンドの顧問に空きがない。音楽の教師は、どこも狭き門だからな。……ところで、実家の打楽器工房の方はどう？」

私は敢えて話題を切り替えた。

「何とかやってる。今では和楽器だけでなく、洋楽のパーカッションも扱い出したの。父を含め五人の職人たちと愛知県内にある中高吹奏楽部の楽器の修理で、毎日走り回ってるわ。オリジナルのティンパニ・マレットも造ってて、ネット通販で、けっこう売れてるのよ」

久しぶりの再会にしては、こうはきはきと標準語で、早口に捲し立ててくる彼女の態度に呆気にとられた。

本来繭子は、恐ろしく耳がいいため、初めて会った時から、

アナウンサーが喋るような完璧なアクセントとイントネーションで標準語を話していた。大学時代を通じて、常にそうだった。

だが津島の人達とは、きつと土地の言葉を使っているに違いない。一度それを聞いてみたいと思った。

「お父さんと地元両方に貢献ができて、芸大に進学させてもらった甲斐があったな」

「もちろん。今に、この都市を東海一の『バンド・シティ』にしてみせるわ。そのためにはまず、津島市市民吹奏楽団を日本一のスター・バンドにしなければ」

その言葉からは、高揚した心情が伝わってくる。

彼女は、地元の中・高時代に、吹奏楽部で、パーカッションという洋楽楽器に親しんだ。その音楽的才能を認められ、顧問の勧めで京都の芸大に進学したので。

大学を卒業し帰郷してからは、津島市を拠点とする「津島市市民吹奏楽団」で音楽活動を行い、そして楽団長に就任したところなどを、私はメールのやり取りで知らされていた。

信号が赤になり、横断歩道の停止線で車が止まった。

市街地は、ようやく暮色に染まり始めていた。左手に大型スーパーの建物があり、土曜日の夕方の所為か、人々の出入りが著しい。住まいから遠く離れた土地に来た侘しさにとられれ感傷的な気分浸っていると、繭子が誇らしげに言い放った。

「私のバンド、全日本吹奏楽コンクールの県大会で代表権が取

れて、東海大会への出場が決まったの」

「それは凄いな。おめでとう」

私は素直に讃えた。

日本は、アメリカと並ぶ吹奏楽王国である。都道府県のコンクールで勝ち抜き、東海大会などの支部大会へ進出することは、大変難しい。

「自由曲は、交響曲第五番『革命』の第四楽章。貴方の一番得意な曲よね」

ちようど車内に、第三楽章終末のハーブのピチカートによる旋律が静かに流れている。

「今年こそ、悲願の全国大会出場を果たさなきゃ。でも、音楽監督が脳溢血で倒れて、東海大会で、指揮ができなくなったの」

弦楽の弱奏が消え第三楽章が終わり、車内は無音になる。

お互いの沈黙が、重苦しい。

「高梨さん。津島に来て、市民吹奏楽団の指揮者にならない」

繭子は重大なことを、いともあっさり口にした。

私は無言で彼女の顔を見返す。

煌めく彼女の鋭い眼光が、本気であることを物語っている。

私が返答に窮していると、車内に管楽器とティンパニによるトゥッティの強奏が鳴り響き、第四楽章が始まった。

信号は既に青に変わっている。

「貴方がもし、東海大会で指揮して、全国への出場権が取れた

ら、市民吹奏楽団の常任指揮者のポジションと地元の高校の吹奏楽部の顧問を譲ると、音楽監督が言ってるの。とにかく今日振ってみて。津島市文化会館で、今楽団員全員が待ってるから！」

フォルテシモで鳴る楽音に負けじと、繭子は大声で『宣告』

し、再度車を発進させた。

「そのために、今日俺を呼んだのか！ まるで陰謀だな」

余りのことに私は叫んでいた。

「革命よ！ 革命！ 高梨さんにとっても私にとっても！ 私たちの歩むべき道がやっとなつていなくなるの！ こうなるまで、ずいぶん時間がかかったけど」

「どういうことだ？」

「プロの指揮者になるのが、貴方の夢だったでしょ。私はそれを邪魔したくなかったの」

「だから俺から離れたのか」

「結婚を持ち出すんだもの。私と一緒にいるなら、津島に骨を埋めてもらわなきゃ」

「確かに当時、二人の歩むべき道は違ったが……」

私は、そこで言い淀んでしまった。

「この三年間で、指揮者としての可能性は十分試したでしょ。私たちのこと、もう一度考えてみない」

「つまり……、あの時のプロポーズは、まだ有効だと思ってい

いのか？」

「それは貴方次第ね！　まず自己変革が必要だわ！　指揮者としても、男としても！」

「だから『革命』と言ったのか。わざとこんな曲まで流して！」

私たちは、金管楽器の咆哮と打楽器の強打に掻き消されないよう、自然に怒鳴り合うような大声で会話をしていた。

やがて、暮れ行く住宅街の道路の一角に、津島市文化会館の豪壮な建物が見えた。

津島という地方都市に、こんな巨大な文化施設があることに驚き、本当に今から此処で、指揮棒を振るのかと思うと、私は急に緊張してきた。

津島市文化会館大ホールの上ステージ上には、六十名近くの楽団員が、準備を整えて待機していた。

無人の客席には、音楽監督と思われる初老の男性だけが、車椅子に座ってこちらを見守っている。

繭子が私のことを全楽団員に紹介し、私が簡単に挨拶した後、さつそく合奏することになった。

首席クラリネット奏者がB♭の音を鳴らし、全ての楽器がチューニングを始める。

私は下手の臨時階段を使い、ステージの上の指揮台へと進ん

だ。

インスペクターが、「マエストロ。これを」と言っただけでスコアに指揮棒を渡してくれた。

その二つを受け取った時、『これでプロへの夢が断念出来た』と感じた。さらに、『繭子と一緒に津島で生きていく決心もついた』とも思った。

指揮台の上から、各楽器セクションを見渡す。メンバー全員、その顔の表情には、こちらに挑んでくるような気迫が感じられる。

この中には、石探祭車の囃し手が多く含まれているに違いない。私の役割は、あの祭りの熱狂を、ステージの上で再現させることだ。それだけのカリスマ性を発揮しなければ、楽団の指揮者は務まらない。

お互い初めての顔合わせだ。勝負は、指揮棒の最初の一振りです決まる。決して臆してはならないと自分を戒めた。

雛壇最上壇に、打楽器セクションが一行に並び、センターのティンパニ奏者の位置にあの時同様、繭子が控えている。目が合うと両手でマレットを示し、につこり微笑んだ。あれが『繭子オリジナルのマレットか』と思う。

少し心が和んだような気がする。いきなり呼び出して、強引に指揮台に立たせておきながら、私をリラックスさせようとしているのが伝わってきた。

チューニングが完了し、ステージ上が無音になる。

私は指揮棒を構え、素早く息を吸い込むと一気に振り下ろした。

冒頭の全音符がクレッシェンドし、繭子の叩くティンパニが、八分音符を力強く刻み始めた。

金管楽器群の勇壮な第一主題を聞きながら私は心の中で、『革命だ！ 革命だ！』と叫びながら指揮をした。革命の勝利の凱歌を表す重厚なサウンドが、大ホール全体に熱狂的に快く響き渡っていた。

〈了〉

## 応募点数七十編

ありがとうございました

津島市への来訪者を増やすことによりまちに「へにぎわい」を創出する「津島へにぎわい」創出プロジェクト」。その取組のひとつとして、「津島短編小説コンテスト」を実施しました。

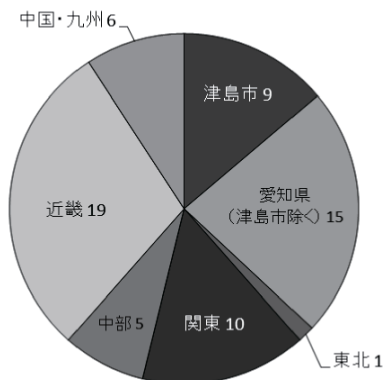
作者の年齢は、十歳〜九十三歳までの幅広い年齢層の方から応募があり、応募総数は七十編でした（選考対象は六十五編）。作者の居住地は、津島市内九作品、その他愛知県内十五作品、愛知県外四十一作品となり、愛知県外からの応募が半数以上となりました。

舞台となった場所は、津島市を代表する観光スポットが上位を占めました。オリジナルティがあり、読者を引きつける魅力的な作品を多数ご応募いただきました。

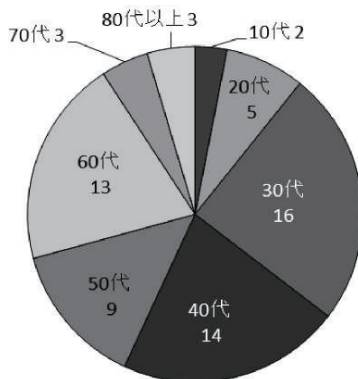
一次選考は十一月から十二月にかけて実施され、十三編が最終選考作品として選ばれました。最終選考会は平成三十一年一月二十二日に行われ、大賞一編と佳作一編が選出されました。

たくさんのご応募、ありがとうございました。これまでの受賞作品とあわせて読んでいただき、津島市を知りたい、訪れたいと思っただけだと幸いです。

住所別応募数



年代別作品応募数



※選考対象外の5編を除く

舞台となった主な場所

場所（選考対象外含む）	件数
① 天王川公園	41
② 津島神社	27
③ 尾張津島天王祭	8
④ 天王通り	6
⑤ 津島駅	4



## 短編小説コンテスト募集要項

### ■募集期間

平成30年7月2日月曜日～10月31日水曜日

### ■応募作品

左記に該当する短編小説

- (1) 津島市を舞台とした作品であること
- (2) 日本語、縦書きで400字詰め原稿、12枚～20枚の作品であること
- (3) 応募者が創作した未公表の作品であること

### ■応募方法

- (1) 専用WEBサイト
- (2) メール [novel@oshi.or.jp](mailto:novel@oshi.or.jp)
- (3) 郵送 〒496-0807

愛知県津島市天王通り1丁目21番地

一般社団法人にぎわい創出機構OSHI宛

### ■選考

- ・ 一次選考で選出された作品を対象に、最終選考委員5名による最終選考会を開催し、受賞作品を選出します。
- ・ 最終選考委員は、委員長 堀田あけみ氏（作家・大学教授）、清水義範氏（作家）、清水良典氏（文芸評論家）、熊澤尚人氏（映画監督・脚本家）、木全純治氏（映画館支配人）

### ■賞

- 大賞（1編）賞状、副賞（30万円）
- 佳作（1編）賞状、副賞（10万円）

REDISCOVERY TSUSHIMA

津島短編小説コンテスト

平成30年度受賞作品集—愛知県津島市が舞台の短編小説

---

発 行 津島市

〒496-8686 愛知県津島市立込町2丁目21番地

TEL (0567) 55-9589

平成31年3月4日発行